国際フォーラム

カナダ留学雑感

黒　川　伸　洋
住友金属工業(株)鹿島製鉄所

1. はじめに

1989 年 2 月から 90 年 1 月までの 1 年間，海外短期留学する機会に恵まれた．留学先はカナダ，モントリオール，マギール大学大学院金属工学科 GUTHRIE 教授の研究室である．以下に筆者が当地で経験した文化の違い，大学における研究システムについて，述べてみたい．

2. モントリオール

御存知のようにモントリオールは北米大陸中唯一の仏文化圏であるケベック州に属し，西のオンタリオ州トロントに次ぐカナダ第 2 の都市である．また仏語系都市という意味でも，本家のパリに次ぐ規模を誇り，名実共にカナダを代表する都市と言える．カナダは人種のモザイクとよく言われるが，モントリオールもその例外ではなく，単一民族国家の中で生まれ育ってきた身にとって，当初はかなり奇異な感じがしたものである．

従って人種の数だけ文化が存在し，それぞれが若干の確執を伴いながら共存している点が最も大きな特徴といえよう．

オールドモントリオールと呼ばれる旧市街地は，新大陸への移民当時を思わせる古いヨーロッパ調の街並みがみごとに復元，保存されており，カナダ国内はもとより，国外からの観光客が絶えることがない．

3. マギール大学

そのモントリオール，ダウンタウンの中心に位置するマギール大学は，12 の学部ならびに 40 の研究センターから成る総合大学であり，特に医学部が有名で，AIDS 研究にかけては最先端をいっている．工学部は五つの工学科 (Department) から構成され，最近では AI (人工知能)の研究が有名である．著者が在籍した金属工学科 (Department of Mining & Metallurgical Engineering) を例にとると大学院生は留学生が半数近くにのぼり，出身国も中国，韓国，インド，中東諸国などアジア系が多く，次いで東欧，フランス，中南米など，全世界にわたると言っても過言ではない．特に東欧諸国の経済崩壊，中国の天安門事件の影響で，これらの国からの留学生受入れが加速したような感じさえ受けた．

これらの学生は一部の国費留学生を除き，指導教授に授業料と生活費を支給されて研究する，いわゆる補助研究員 (Research assistant) であるが決して暮らしぶりは楽ではなかったように記憶している．北米においても日本と同様，学生の工業離れが顕著であり，産学一体の開発体制の中で彼らの安価で優秀な労働力が必要欠くべからざるものになっているのが現実である．

マギールは仏語圏における英語系大学という微妙な立場にある．70 年代にケベック党が州の政権をとり，カナダ連邦からの独立を唱えて以来，州の大学予算は仏語系のモントリオール大学中心にまわされるため，特に設備面などで，見劣りする部分があるのは否めない．

従って，企業からの研究費が容易に得られる大学院での委託研究に重点がおかれる傾向にある．実際，教授の手腕として，いかに多くの企業とコネクションを持ち，研究費を獲得するかが問われるため，一年のうち相当期間を対外折衝のため奔走されている場合が多い．

教授のみならず，指導スタッフもしばしば会社・工場に赴くが，主な目的は自己の知識向上もさることながら現実の生産現場の理解を深めることにある．このため，マギールにおける鉄鋼研究は基礎的研究と並行して，実操業プロセスの改善，開発を目的としたものも多い．

これらが日本の大学における研究体制と大きく異なる点であろう．

4. おわりに

留学した当初は，語学のハンディキャップならびに生活習慣の違いから，とまどいを感ずることが多かった．

特に多民族共存の歴史からくると思われる，独立独歩の精神については，邦人にはまず理解しがたいものである．すなわち，自分は自分で守る以外にないという危機感からか，納得のいかないことには徹底して自分の意見を主張し，決して中途半端に終わらせることはない．

従って，なんとかなるさというような甘い考えの持ち主はまずいないと言ってよく，その場合は本人が報いを受ける仕組みになっている．当地でも，邦人は何を考えているのかわからないという声をよく聞いたが，昨今話題になっている諸外国との摩擦の背景にこの生活習慣の違いがあるのは間違いのないところであろう．

生活をエンジョイすることにかけても邦人は彼らに遠く及ばない．すぐ郊外に大自然が広がっていることもあり，アウトドアスポーツはお手のもの，平日においてもみごとな割り切りを見せ，夫婦で夕食後にコンサートに行くなど，あくまでも自らの生活の充実を基盤に考えている．

カナダ人のこのような生活は，豊かな資源をバックとしたものであり，資源小国日本では，これは通用しないかもしれない．しかしながら今後日本が国際化していく上において，こういう世界が存在するということを十分に理解し，自らの主張を明確にしていくことが切に求められているのではないだろうか．

幸い GUTHRIE 教授は大の親日家である．今後我が国の研究者が多数彼の研究室に学び，双方の技術的連携を深めるとともに，異文化を肌で味わう機会を持たれることを願うしだいである．